

ぱりこれ。

Vol.2

無料
¥0
FOR FREE



島根県出身在住のイラストレーター
兼 まんが屋のお仕事・作品遍歴

201701

ご挨拶。

一年振り。一年振りである。

年賀状代わりにセルフマガジンを作ると決め、第一作目を刊行してからもう一年。

一作目は百冊刷って、一年かけてゆっくり配布するつもりだったのに、月末にはもう無くなってしまった。日本人の多くは無料だと、たとえそれが無用の長物であろうと取り敢えず手に取る。百冊中何冊の「ぱりこれ。」がゴミ箱もしくは古紙回収へと消えただろうか。



▲第一作目の「ぱりこれ。」

二〇十六年はとにかく忙しかった。仕事は増えたが、貧乏なのは相変わらずだった。

セルフマガジンのお陰で手に入れただろうと思われる仕事はほぼゼロ。何の為に作ったのだろう。

それでも二〇十七年もまた作ってしまうのは、セルフマガジンに可能性を感じているからだし、そもそもこういう物を作るのが好きだからだろう。

第一作目のセルフマガジンは「仕事をより獲得する為」に作つた筈だったが、自己顕示欲が強すぎて何を言いたいのかさっぱり分からなかつたし、何より素でダサかつた。今作は、粗つたダサさのようなものを出して行きたい。

そしてこのセルフマガジンで初めて私を知った人に、少しでも興味を持つてもらいたいし、少しで

もゴミ箱や古紙回収へ出されてしまう数が減る事を祈る。

元々わたしの作るのが好きな方は、いつも通り楽しんでいらっしゃい。

二〇十七年一月

ともえ
印



▲汚れなき頃のあざと可愛いわたくし

めしや
巴季古

めしやだつた。

皆さんには「深夜食堂」というドラマ或いは漫画をご存知だろうか。わたしはこのドラマの世界観が大好きだった。（後に原作も読んで好きになつた）

大好きな虚構の世界観をコスプレ等により現実世界へ持つて来ようとするのはオタクの性である。オタクであるわたくしもその性に抗えず、店を作つた。

飲食店なんて、やつたこともないのに。

「深夜食堂」は実現したのだ。では何故閉店したのか。

二〇十五年四月から翌年の十月まで「めしや巴季古」という飲食店を営業していた。

皆さんは「深夜食堂」とい

うドラマ或いは漫画をご存知だろうか。わたしはこのドラマの世界観が大好きだった。（後に原作も読んで好きになつた）

最初は「昼営業のみ」だったが「昼ではわたしの求める深夜食堂が出来ない」と気づいたが、徐々に夜営業へシフトチエンジした。

とにかく深夜食堂をやりたかったわたしは、あの伝説の名台詞「できるもんなら、何でも作るよ。」を再現しようとした。メニューにないもの

や深夜食堂に出てくるメニューを沢山作つた。まるで「深夜食堂」のように、知らない人同士で会話が盛り上がる夜もあった。

単純に、心身の限界だ。

初見のお客さんに「何で閉めるんですか」と聞かれ、面倒臭くて「お客様が来ないから」と答えてしまつたが、本当はお客様が増えてどうにも回せなくなつたから辞めたのだった。

それでもあの店も、来て下さつた多くのお客様も好きだった。今も、始めた事にも辞めた事にも後悔はない。



▲毎日豚汁を作っていた

ネコトバ。

白黒ハチワレ猫のイラストに毛筆の文章(ポエム?)をついた作品「ネコトバ」をもう十年も描いている。今年の四月で十一周年となる。猫はかわいいのに言つてゐ事が深い・キツいなど好評である。

ネコトバは「猫^{ネコ}」と「詞^{コトバ}」をくつつけただけの造語だ。
近年、志茂田景樹先生が「猫様のお言葉(ネコトバ)」という作品集を発表し始めて戦慄している。
早く商標登録をとりたい。

二〇一二年頃から自分の出身在住地・島根県の方言「出雲弁」と合わせた「出雲弁ネコトバ」という作品も描くようになつた。

しかし、田舎の方言グッズなんてそうそう売れるものではない。年々低迷していくので「もうやめるか」と思つていた所へ新聞社から「出雲弁ネコトバ」についての取材が入つた。

まだ描けという出雲の神様からのおぼしめしだろうか。ちなみに二〇一七年一月現在わたしのが住んでるのは、出雲市ではなく松江市である。

十年も描いてきていまいち有名になれない事にうんざりしつつも、これからもずっと描いていくのだろう。



▲「ネコトバ」の一例(左端が出雲弁)。ブログで更新しているネコトバは400作品に迫る。

コミニックエッセイ。

漫画家に、なりたかつた。
小学生にして漫画雑誌に投稿するほど。

しかし高校生の時、同級生が胃潰瘍寸前になつてまでデビューア「あんなに努力するの無理」と思つて諦めた。

漫画家は諦めても、絵はずつと描いていた。フリーでイラストやデザインの仕事もしていたが、漫画の仕事は殆どなかつた。人の似顔絵を描くのも苦手で敬遠していた。

そんなわたしが、パートナーと自分の話で「おじさんとねんちゃん。」などというコミックエッセイを描く事にならうとは。(ブログで連載中)



▶記念すべき第1回。折角なので
カラーにした(本編はモノクロ)

わたしのコミックエッセイの原点は、パートナーが読ませてくれた「僕の小規模な生活(福満しげゆき著)」だ。

結婚後に描き始めた福満氏にならい、自分も結婚してから描こうと思っていたのに、

そんな流れにならないので痺れを切らして描き始めた。

最初はカップルの時にこんなもん描いて別れたら恥ずかしい、と思っていたが、今は割とその辺はどうでもいい。

わたしはこのコミックエッセイを「おじさんプレゼント漫画」だと思っている。仮に別れる事になつても、こんなにイイ男と付き合つてたんだなア!という思い出漫画となつて欲しいものだ。

内容はモテない三十代同士の不器用恋愛ほのぼのコミックエッセイかと思いきや、結婚・周囲の声・わたしの病気についての悩みなど時々重ためなシーンも含まれる。

島根県子ども子育て支援課様
こののは受賞作品挿絵 ▶



個人のお客様
ご自宅のペットをイラスト化&
Tシャツデザイン◀

▲鳥取県米子市/BALふり~だむ様
お店の方をモデルに
イメージキャラクター&名刺作成

丸い絵ばかり描いている訳ではないのです。ご希望の様々なテイストで制作可能です

▼個人のお客様
スポーツ選手応援旗デザイン



▼イベント
フライヤー用カット



イラストレーターなどというものは因果な商売である。

余程の売れっ子にならなければ裕福にはなれないし、中には時間の自由が全くなく、健康を害す者も多いと聞く。

クライアントの無理な注文で脳の血管が切れそうになつても、世の中には「自分の好きな（遊びの）仕事ができて羨ましい」というイメージを持たれてしまう。ミュージシャンやお笑い芸人の方なども似たような事を言われているのだろうか。

フリーランスで自分の描くイラストにお金を頂けるようになつたが、わたしはまだ自分の事を「ちゃんとしたイラストレーター」だと思えていない。

イラストだけで充分な収入を

得たり、それで生きてきた実感がないからだ。何より、それを目指して来なかつた。（お陰でめしやができた訳だが）

めしやを辞めると考えた時に、ひとつ決意した事がある。それは「ちゃんとしたイラストレーターになる」こと。今はその為の試行錯誤をしている最中だ。

店を辞めるずいぶん前から薄々「もう限界そう」と思つていたので、六月末頃に島根県のイラスト公募へ作品を応募した。

わたしはずつと「自分なんかに県の仕事がもらえる訳ない」と勝手にいじけて自分に言い訳していた。けれどもう、そういう言い訳はやめようと思った。

結果、わたしはその選考に通り

採用された。嬉しかつた。チャレンジして報われるのが。

わたしに何より必要なのは、自分の魅力を認める自信と、それを売り込む営業力だ。

このセルフマガジンが、それを育てる一端となる事を祈る。

二〇一七年一月

ともえ



著者プロフィール

ともえ(巴)

島根県松江市出身在住。

ブログ「ぱりことば。」(<http://nekotoba.jugem.jp/>)をほぼ毎日更新中。

イラストや漫画や文章を書いたりネットショップを運営したりしている。

1983年7月21日生。

ここまでお読み下さり
ありがとうございました！

最新情報はブログで

ぱりことば。→



ぱりこれ。Vol.2

2017年1月 第1刷発行

著 者 ともえ

発行者 伊藤 巴

発行所 巴李古(ぱりこ。) -palico.-

〒690-0056 島根県松江市雑賀町93番地 伊藤ビル内

E-mail palico@ai.to

URL <http://palico.chu.jp/>

印刷所 株式会社 グラフィック

©Tomoe(Palico.)2017 Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取替え致します。